

## 漫画研究への扉

日下, 翠  
九州大学大学院比較社会文化研究院

南雲, 大悟  
國學院大学・二松学舎大学・日本大学非常勤講師

アンカナー, ジラジランチャイ  
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

佐島, 顕子  
福岡女学院大学人文学部現代文化学科

他

<https://hdl.handle.net/2324/16791>

---

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-09-20. 梓書院  
バージョン：  
権利関係：

# 中国大陸における 漫画の展開と現状

南雲 大悟

## 1. 中国漫画の誕生

## 2. 中国漫画の基本路線

新中国建国以前

新中国建国以降

## 3. 中国漫画の新機軸

## 4. 中国漫画界の諸問題

漫画侵略への批判

2つの「漫画」

中国漫画界の独特な展開について、漫画の周辺にも触れつつ創世期からの歴史的経緯や各時期に見られる特徴より考察していきたい。

## 1. 中国漫画の誕生

中華民国時期以前、「漫画」に定まった名称は無く、「諷刺画、寓意画、諷諭画、時画、諧画、笑画、滑稽画」などと呼ばれていた。

近代漫画史上最も早期に現れたのは清末の義和団による宣伝画が挙げられる。標語が附された宣伝ビラは街中に貼られ、美術を利用したものも広く利用された。その形式は、中国の民間工芸「年画」そのもので、左右に精巧な文言が配されており、これに図画を足すことで庶民に分かりやすい「大衆の芸術」が創作されていた。

これに続く五四運動時期にも美術作品による宣伝工作が行なわれる。畢克官（1986）に、「漫画」として挙げられた作品について取り上げてみる。

この時期は、五四運動中の人民の団結を描写し、日本帝国主義と手を結んだ売国奴に懲罰を求めるものが多々見られた。沈泊塵の「工学商打倒曹、陸、章」（図1）は、画中の三つの拳に「労働、学、商」と書き、人民が曹汝霖、陸宗輿、章宗祥を叩く場面を表わす。当時の人民は総じて無力で微弱な存在として描からえることが多かったが、この絵では巨大な力を有する拳となって現れ、民衆の結束が大きな力となることを表現した。

畢克官によって「漫画」とされたこの時期の作品について、中国の文豪・魯迅は以下のような文章を表している。

図 1



「上海の何とか報の増刊《澆克》で幾つかの諷刺画を見た。その画法は西洋の真似をしているのであるが、それも疑わしい。どうしてあのように頑固で、人格が卑劣なのか。教育を受けなかった子供が白壁に『誰それのバカ』としか書けないのと一緒にである。諷刺画が人身攻撃の器具になるのは不思議で仕方ない。」(《随感録四十三》)

「《澆克》の芸術家が口々に新芸術・真の芸術というのは、自分らがこれこそ新芸術・真の芸術と思っているからであろう。ただ、彼らの描いた諷刺画は、多くが新文芸や新思想を攻撃するものだと思はう。」(《随感録五十三》)

これらは魯迅が当時の作品における宜しくない傾向を批判するもので、革命運動の需要から諷刺を強調した筆圧・色彩ともに力強い作品が揃うも、その意図に疑問を感じさせる点が幾つも存在したことが窺えよう。

この後、中国で「漫画」という名称を広める《子愷漫画》が登場する。

この作者は現在も「中国漫画の開祖」と呼ばれる豊子愷（1898～1975）である。1898年浙江省崇徳県石門鎮（現在の桐郷市）に生まれ、師範学校入学後、西洋美術の習得方法である人体デッサンや写生法にはじめて触れる。1915年雑誌《新青年》創刊以降、新文化運動が起り、

伝統文化の批判、そして西洋文化受容の高潮を迎えると、伝統的美術習得方法（手本や古典作品を臨書・模倣する学習法など）が批判され、写実・写生法が注目される。この伝統美術批判が大きく作用し、美術専攻・志望の学生を西洋美術に向かわせた。豊も例外ではなく日本留学を果たす。その時日本で出会ったのが竹久夢二の作品である。詩情を含むその表現内容は、中国の文人画に相通

図2



ずるものがあり、豊子愷を再度東洋美術へと回帰させる。帰国後、豊子愷は教員・編集者などをつとめながら創作を続けた。そして、遂に豊子愷の作品が各方面の目に留まり、作品がメディアに登場する。

1924年に作家の朱自清が《我們的七月》を出版すると、豊子愷は表紙のデザインだけでなく、ここで「人散後、一鉤新月天如水（人々が去りて後、新月の浮かぶ空は水面のようである）」（図2）を発表する。

当時《文学週報》主編であった鄭振鐸は豊の作品の印象について語る。

「この一年、豊子愷と彼の『漫画』は私に深い興味を抱かせた。私は彼

の作品に出会った後、彼自身と出会った。初対面は《我們的七月》上である。彼の作品『人散後、一鉤新月天如水』は、たちまち私の注意を引いた。まばらだがおおらかな数本の墨痕は、御簾を描き、卓に置かれる。卓上には急須一つ、湯のみが数個あり、空には鉤状の新月が浮かぶ。我が思いはそれらの詩の境地に導かれ、心中にはなんとも言い表しようのない美感を受けた。(中略) その時以来、私は『子愷』の名前を覚えてしまった」

(豊華瞻・殷琦《豊子愷研究資料》寧夏人民出版社、1988年、pp247-248)

鄭は豊子愷を訪ね、《文学週報》の挿絵作画を依頼する。その後《文学週報》誌上に作品が発表され始める。そして同年、作品集としてまとめられたのが《子愷漫画》で、これにより「漫画」という言葉が中国に広まる。

豊作品の特徴は、その「画趣」であり、筆致や画風および彼自身の告白から竹久夢二の「詩画」に影響を多々受けたようだ。

元、明、清の時代の文人画は、詩人が同時に画家を兼ねることが多く、詩と画の一体化が栄えた時期である。固有の芸術表現方法をもつ二つのジャンルはよく重ねて捉えられ、「詩中有画 画中有詩」は中国文人の審美理念の一つなのである。

《子愷漫画》発表を受けての周囲の反響は一様に讚美の声をあげている。鄭振鐸は「豊子愷の“漫画”を手にし、心に新鮮な領地を得たような楽しい気分」<sup>1</sup>と評し、新しい芸術手法が確立された喜びを素直に表している。また、鄭以外でも、作品における詩情・画詩合一の特徴についても両手を挙げて讚美され、「われわれはあなたの“漫画”が詩情を有しているのが好きである」<sup>2</sup>、「一面に咲く開花したての花は、この世の情趣を含んでいる。それが《子愷漫画》を見た所感である。——絵を“見る”では興をそがれるので、絵を“読む”とってこそ正しく、まして

やあなたの画集はあなたの詩なのだから<sup>3</sup>』といった評価を得る。

これからもわかるように、豊子愷の作品は義和団や五四運動の時期に見られた前段の作品とは、その抒情性あふれる画風及び創作意識の上で、色合いを異にするものであったことがわかる。

当時、中国で広まった豊子愷による「漫画」は、豊子愷留日当時に主流であった岡本一平・北沢楽天などが担った諷刺・滑稽中心の日本の「漫画らしい漫画」ではなく、竹久夢二の「詩画」の影響による。「誕生」した時期、つまり「名称が使用された」時点における中国の漫画とは、豊子愷による抒情的詩画の実践であったのである。

## 2. 中国漫画の基本路線

豊子愷の《子愷漫画》が世に出て、「漫画」という名称が中国において広く使用され定着する。作品のタイトル・雑誌などの表紙に「漫画」と冠するものが次々と中国美術界に出現した。しかし、豊子愷のそれとはかなり異なる作品が主となっていく。それは宣伝・攻撃を主とした類のものである。

### ○新中国建国以前

抗戦時期は日本軍の侵略行為を攻撃すべく、多くの漫画家が大量の宣伝漫画を制作した。学生・知識階級層による五四運動以降の、新文化運動が広まる中で、宣伝画やチラシなどの視覚媒体が注目される。

1926年5月に広州開催の第6期講習所は毛沢東が担当し、過去最大の規模で行なわれ、農民運動の指導者育成に向け「革命画課」を開設した。実際の受講生を農民運動に参加させるため、1926年8、9月、絵のうまい受講生50名を選抜養成し、広東省曲江県及び海豊県に派遣した。派

遣された受講生たちは講習所で学んだマルクス主義などを、漫画や宣伝画を用いて農民に理解させるという活動を行なった。

農民運動講習所「革命画課」では、教員や学生にタイトルやヒントを与え、当時の革命闘争と緊密な革命画が描かれるよう手助けをした。革命画は教室や食堂、廊下の壁に貼られ、記念日や群集大会、デモになると、毛沢東が宣伝漫画を街に貼るよう促し、あるものは歌謡と合わせ、ピラにして配ると、農民が争ってその会に加入したという<sup>4</sup>。

1920年代後半、毛沢東は井冈山を根拠地とし活動（紅軍を編成）し、そこにおいても宣伝工作に関する決議が出された。大会決議案では、「紅軍宣伝工作上の問題」として、政治的影響の拡大と、民衆との団結を、「紅軍宣伝工作的現状」として、党幹部や兵士の中の紅軍宣伝隊や宣伝工作に対する軽視の風潮を正すことを、また、宣伝方法については全体的に多種多様にすることが唱えられ、全軍で絵画による宣伝工作を集めさせるよう指示が出た<sup>5</sup>。

この流れが「ペン・筆による戦い」を進める基本路線となり引き継がれていく。

その後、抗日の機運が高まるや、宣伝画集のみならず、全国的な漫画展覧会も開催された。漫画展覧会の入場者は絶えず、展示の延長が常になされ、各地で巡回展示が求められた。漫画家は各地で抗日漫画宣伝部隊を成立、抗戦画展を開催し、宣伝工作に従事する。漫画創作は国共内戦期にも継続され、建国後も宣伝・攻撃の用途を主体に展開していくのであった。

### ○新中国建国以降

戦争終結後、漫画は戦争対象への攻撃から、国内統治への作用が期待された。建国以降、漫画の主体は「人民に奉仕する＝政治に奉仕する」という等式の中で、その存在価値が求められた。



「“漫画”は政治の産物であり、“漫画”を描くことは一つの政治任務である。“漫画”は作者が自己満足を求めるためではなく、労働者・農民大衆が政治レベルと、制作に対する認識と普及の深化を向上するためのもので、暗黒を暴露し、敵を打倒し、光明を讃美し、群集を激励し、高度の宣伝作用と教育的意義を有するものである。」

(張学廉《漫画創作研究》大東書局、1951年(再版)、pp82-83)

1950年3月13日、《人民日報》に「漫画はさらに人民に奉仕しなければならぬ」という題の読者の声が掲載され、紙上に載った幾つかの不適切な漫画について批判が加えられた。《人民日報》はこれに対し、編者註を添え、われわれの漫画作家の筆墨は新中国社会の根本的變動を深く記さねばならず、人民が主役である時代を表現し、人民が自分の領袖、国家に対して、労働の新たな態度及び人民間の新たな関係を表現せねばならない。これらの人民生活こそ新たな芸術形式の源泉である、と述べた。

1950年代の漫画は朝鮮戦争、三反五反、胡風批判、増産節約、大躍進などの政治運動と合致し、前期は国際漫画を主とし、後期は政治闘争と人民内部矛盾を主とする作品群が描かれた。

諷刺漫画はその表現方法から、総じて敵を攻撃することに適したものと見えるが、体制賛美型の漫画も続々と現れ、人民の教化に利用された。

抗日戦争や解放戦争を経て共和国建国に至り、ソ連とともに社会主義国家としての歩みが始まる中、1958年、毛沢東の強い主導の下「大躍進運動」が展開される。これは国力増進・近代化を目指すもので、ロシアを模した人民公社もその過程で設立された。この国策を支援すべく漫画を活用し、宣伝・喧伝がなされる。「家畜がよく肥えて育つ」「稲穂が直

立するほどの密に実る大豊作。子供が乗っても動かない」といった状況を、写真や漫画などの視覚メディアが創作表現して、大衆に知らしめたのであった（図3）。

ところが、大躍進政策が間もなく破綻するのは周知である。農村では

図3



財産が公社所有となり、集団労働・共同食堂といった絶対的な平等主義のもとで、農民はやる気を失い不満が募る。また、鉄鋼増産のために大動員がなされる。穀物価格高騰により農業生産は停滞し、農民の窮乏は深刻化…と、漫画と実際は全く反対の事象が起きていた。中国において、体制に不利となる内容は真実であっても漫画創作には適さなかったのである。

その直後、中国漫画受難の時代と呼ばれる文化大革命を迎える。

まず、それまで創作されてきた既存の漫画作品は「共産党を批判した」もしくは「国民党などの敵陣支援をした」という大きく分けて二つの創作意図がこじつけで各作品に読みこまれ、その作者たちが批判された。それらの作品群は「反党黒画」と侮蔑される。その一方で、劉少奇・鄧小平など批判される者を描く漫画は存在し続け、大量に作成され、至る所で諷刺・攻撃の作用を十分に発揮した。これらを現在では「造反漫画」(図4・5)と称する。中国側の論説では、この時期を「中国漫画受難の時代」とするものがほとんどであるが、実際には、「造反漫画」がピラや壁新聞として多作され、大豊作なのである。正規の漫画家からすれば思い出したいくないこの時期も、漫画の数量からすれば、「受難期」と言うよりも「隆盛期」というのが妥当である。

文化大革命の終焉を迎え、四人組打倒を経ると、まず上海市外灘と南京路などで多くの四人組を批判する壁新聞が出現した。その他各地の漫画作者も筆を操り、公開・展覧形式で林彪・四人組に猛烈な漫画による抗議を行なった。

全国レベルの四人組批判運動の展開をめざし、当時の中国共産党中央政治局は人民日報社に指示し、四人組を暴く漫画の出版を組織した。具体的には、全国から四人組暴露の漫画原稿を集め、漫画の出版・編集を行なった。この漫画集は2冊で1セット、《除四害》と命名される。人民日報社から印刷され、1977年2月、《除四害》第1集が、3月には第2集がそれぞれ無料で出された(図6・7)。その後、全国各地で大規模な四人組暴露運動の中、大量の漫画が出現する。

当時、華君武、英韜らが人民日報社から漫画増刊号の出版を企画し、四人組打倒運動を更に深めることを理由の前面に掲げ、早期の出版を提言する。この提言を受け、当時の中国共産党中央宣伝部部長胡耀邦は人民日報社に発行許可を出し、その年の12月試験版を制作、1979年1月



図5

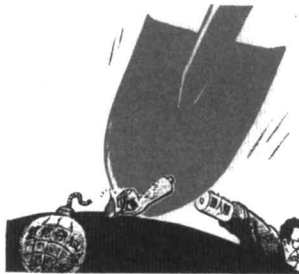


図6

# 除四害

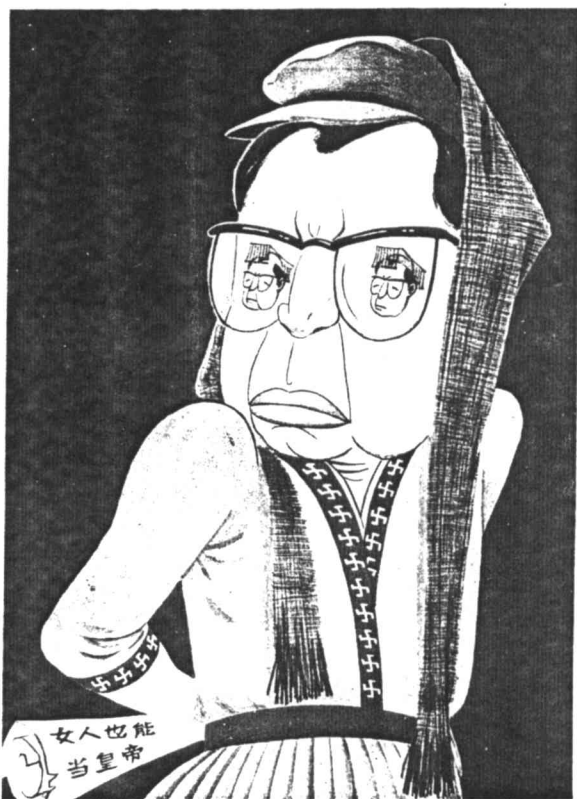
## 漫画集

(一)



人民日报社编印

图7



江青眼里有谁？

孙以增画  
池北偶诗

洋为江用，  
卑而不亢。  
发是假发，  
进口西洋；  
牙是假牙，  
进口东洋。  
进“外国月圆，  
外国屁香”。  
一副洋奴丑相。

古为江用，  
装模作样。  
想学武后，  
异服奇装；  
想学吕后，  
怪调怪腔。  
“女可治国，  
女可当皇”。  
满脑帝王思想。

20日、人民日報の漫画増刊《諷刺與幽默》第1期が読者に顔を見せた。当該紙は今尚、漫画関連人材育成や表現方法、漫画史、漫画理論の発表と同時に、国策に従う宣伝媒体としての役割も担っている。

その後も、中央・地方を問わず、紙メディアには漫画欄は欠かせなくなっている。もちろん、宣伝・諷刺のニュース性を重んじた作品以外に、読者層に合わせたユーモア漫画も存在するが、その「伝統的漫画用途」は廃れず、現在に至るまで、大きな政治的任務を果たす場面に登場する。

近年の具体例としては、中国政府が邪教とした「法輪功」への攻撃やWTO加入、北京五輪開催決定の歓喜などが挙げられ、時々の政治路線・意向と共に歩んでいる状況が伺える（図8）。

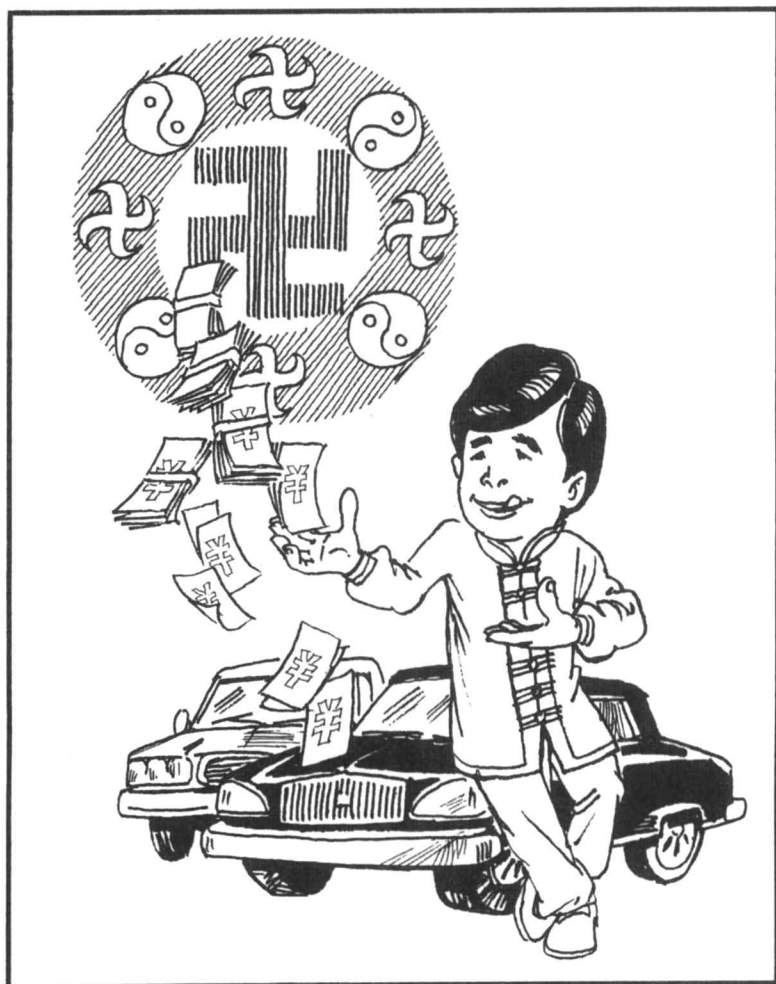
### 3. 中国漫画の新機軸

1980年代の日本アニメ受容。そして、1990年代前半、中国で最初のストーリーマンガ雑誌とされる《画書大王》の登場により、ストーリーマンガに触れた中国の作者やファンたちはマンガ<sup>6</sup>創作熱が高まり、関連人材の育成、新文化発展の素地が広がる。

1993年に登場する《画書大王》は毎月30万部の売上を出したと言われる。但し、それを制作した四川希望書店は、当時中国国内で最大の海賊版販売商であり、結果として日本海賊版を売りさばき、儲けていた。その影響力のため、日本側の抗議を受けた中国政府当局は希望書店に対し、行政指導を行ない、国内オリジナルのストーリーマンガを寄稿してもらうよう管理した。日本のストーリーマンガに触れた国内のマンガ作者やファンたちはそれに挑戦し、《画書大王》の寄稿戦略は重要な契機となり、自由な創作発表の場を提供する。



图8



54 据目前掌握的情况,李洪志以其亲属名义在北京、长春拥有数处豪宅、多辆轿车,他利用“法轮功”聚敛了巨额财富,偷逃了大量税款。有关他敛财的详细情况,有关部门正在进一步调查。

《画書大王》は国内オリジナルの方法を支持したが、1994年末より海賊版撤廃運動が起こり、閉鎖された。

このような状況下、中国政府は自国における創作者育成を支援すべく、「中国児童動画図書出版工程（通称：5155工程）」を始動する。

その内容は主に、①2、3年の内に全国の創作・編集・出版・発行の力を結集させ、5つの児童動画図書出版基地を建設する。②大型動画図書シリーズ15組を創作する。③マンガ雑誌を5誌創刊して児童・少年の広範なニーズに応える（図9）、というものであった（**5つ**の出版基地・**15組**のシリーズもの・**5つ**のマンガ雑誌、から「5・15・5」工程）。

この他、輸入マンガの市場氾濫や低俗な内容のマンガが子供たちに接する機会を抑える措置も組みこまれていた。実際にはこちらの意図（阻止・抑制）が大きかったようで、その効果は数字として現れるようになる。市場の90%は国外のマンガだったものが、具体的な「取締り」という形の擁護を伴い、1995年と1996年、各種国外からの法規違反動画読物300有余種、4000万冊余りが処分・没収され、11の重大法規違反の出版社と不法書店商に処罰を行ない、国外マンガの氾濫を制した。

これらの取締りや規制は、海賊版販売などの裏流通を、健全なマーケティングへと転化させる作用を引き起こし、中国のマンガ市場が転機を迎え、活発な提案がなされた。産業化確立のために経済界の参与を呼びかけること、日本を例に発展の方向性を指示する論調も頻出する<sup>7</sup>。しかし、中国大陸におけるマンガの産業化について、周・余（2002）は①低収入・低報酬（A4頁の創作で60～100元の収入は見合わない）、②多くが学生の手により、何らかの制限がある、その他、日本や香港台湾の作家に比べて努力が足りないと、いくつかの問題点を指摘する。ここをどのようにクリアするかが待ち望まれる。

これらを踏まえ、人材育成も積極的に行われるようになった。1998年から、東方文化研究会漫画分会と中国連環画研究会は毎年全国規模の

图9



漫画コンクールを実施した。その際、香港文化伝訊社の協賛も得て成功を収め、この催しから、北京展覧館で毎年行われている北京卡通芸術技術交流博覧会がスタートした。

現在、中国大陸において発行される漫画雑誌はその特徴・特色が次第に認知され、それぞれに熱狂的な読者を有している。どちらかということ5155工程の庇護下に誕生した《北京卡通》、《少年漫画》、《中国卡通》、《卡通先鋒》、《漫画大王》は今となっては目立たぬ存在である。特に《中国卡通》誌（小学生向）に代表されるように「民族的漫画」を目指す、「科学知識を深める」等の娯楽にとって「余計な」目的が附与され、読者も反応が悪くなるようである。

一方、現在大陸で売上を二分すると言われる《漫友》や《新幹線》といった地方発信のマンガはメキメキと力をつけ、台湾・香港の作家の作品を掲載するなど娯楽完成を追求することで成功している。

現在、中国ではアニメとコミックやストーリーマンガを総称して「動漫（ドンマン）」と呼ぶ。冊子メディアの享受に加え、これらの愛好者はインターネット上でも、自身の好きな作家・作品を応援・議論する（図10）。アニメについては、テレビ放映、安価なVCDやDVDの購入はもちろん、好きな時間に好きなだけ、ネット上で動画を鑑賞するのも主流となりつつある。

また、マンガ雑誌は郵便

図 10



局などでしか購入できなかったが、今ではコミック（単品冊子）の体をなす所謂「単行本」が書店で販売されるようになり、書店で立ち読みをする若者も増えているようである。

今や漫画と言えば「コミック・ストーリー系」を思い浮かべる人がほとんどで<sup>8</sup>、青少年娯楽文化の一翼を担うに至った。

しかし、前章までの伝統的な漫画も同時代に並行して存在しており、新旧の衝突を引き起こす事態が散在する。

#### 4. 中国漫画界の諸問題

新しいマンガの隆盛と同時に、中国漫画旧派は新しい勢力に対して、厳しい視線を向け始める。

##### ○漫画侵略への批判

中国漫画の旧派を代表する漫画家華君武は日中関係と重ねて皮肉る。

「日本のCOMICが中国の児童少年の心に侵入した。これを私は漫画における“七七事変”と称す。聴くところに抛れば多くのこどもが、すぐにとりこにされ、われわれの伝統的な連環画（小人書）も読まなくなった。これは驚愕の事件である。」

（華君武「漫画家華君武認為“動画卡通”訳法欠妥」《中華読書報》1996年2月28日第1版）

また、日本のコミックが中国市場に参入したことは児童娯楽の隙間を埋める作用を果たしたと評価する意見もあるが、中国の文化事業への挑戦であるとし、物心両面からの影響を危惧する者もいた。また、日本に

における中国古典を題材にしたマンガを挙げ、日本史をテーマにした作品の飽和状態打開に漫画家が中国歴史故事へ新境地を求めたと分析するとともに、それが中国漫画市場開拓を視野に入れた戦略であると推測されもした。

これらのマンガの問題点として議論されたのは、「暴力・色情・知識の真実性・民族性・価値概念」においてで、健全な児童文化として成り立たないと真っ向から批判し、今も蔑視する旧派の漫画家は大変多い。

ストーリーマンガへの批判は「児童青少年に悪影響を与える内容を含む」ことが中心であるが、そこから派生した「マンガ先進国日本」への批判も数多く見られる現状もある。とても残念である。

### ○2つの「漫画」

現在、中国には「漫画」を指す言葉が多く存在する。「漫画 (manhua)」を政治諷刺漫画や新聞に掲載される一コマの類とし、ストーリーマンガ・コミックの類を「卡通 (katong) (英語「cartoon」の音訳)・「新漫画」・「新型漫画」・「故事漫画」・「新連環漫画」などと呼ぶ。近年、呼称の統一を求める声もあるが、実現はせず、今尚書き手・話し手が様々な呼び名を作り上げる。この事態は確かに新しい「マンガ」の輸入・発達によってもたらされたものである。

その中で、「動“漫”」とあるようにコミック・ストーリー系にも中国語の「漫画」を使用する風潮が現れた。

しかし、新しい「マンガ」登場以降、従来の諷刺漫画創作を主としてきた漫画家はこれに対して好意的ではない。問題続出の新しい「マンガ」と、自分達の創作してきた伝統的な、革命のための、人民に奉仕する「漫画」は全く違うものであると主張し続ける。以下、その一例を挙げる。

「漫画とカートンは造形の上で誇張・デフォルメ・ユーモアで共通の部分があるが、関連する範囲・ストーリー構成・ユーモア性から言って、決して同一種の絵ではない。互いに参考にすることはよいが、各々代わることはできない。

この二つを区分するために、カートン（卡通）に対して、市場には新漫画（新漫画）・カートン漫画（卡通漫画）・ストーリー漫画（故事漫画）という呼び方があるが、全て正確ではない。カートンはカートンであり、漫画だけが漫画なのである。連環式の漫画を連環漫画と呼び、連環式のカートンは連環カートンと呼ぶのである」（魏鉄「漫画與卡通」『漫画信息』1999年第3期・4期合併号第7版）

この一文から、漫画旧派の「区別」というより、相手への「拒絶」反応が感じられよう。ここでは特に双方の思想性や品格の違いについて記していないが、商業主義、マイナスイメージを伴うマンガ・カートンが、自分たちの「漫画」として同一視されることは、人民への奉仕を担っていく点で確実に不利となる。中国の漫画は今後も重要な役割を果たす必要があり、良くない風潮との同化は絶対に許されず、その保身に対する意識が表出した言動である。

以上、「漫画」の分類や呼称に関する現状について、趨勢としては「漫画という総称化」に流れているが、従来からの旧派の漫画家による「我らこそ漫画家」といった「自己の正当化（あるいは正統化）」への拘泥も消えない。

## 終わりに

5155工程実施後、新しいマンガ側にも「政府御墨付き」が与えられ、「マンガ」は娯楽文化としての成長・経済効果など多方面に渡って“公に”期待される事物となりえた。また、実際に市場及び児童・青少年の間に一気に受け入れられた。今後の産業化がどのように展開するかによって、作品自体の飛躍も左右される。

他方、従来の「漫画」は、成長著しい相手「マンガ」を意識すればするほど、「呼称区別」を筆頭に、却ってその蔑視の態度や畏怖を表面化させる形となっている。創作に関して言えば、市場や産業化から乖離した「御用漫画」の需要は今尚保障されており、絶対に廃れない。ただ、娯楽文化としての勃興・充実はあまり期待できぬため、あらゆる意味で「安定した」世界を築いていこう。

新旧漫画双方は、相容れぬ者同士、しばらくは独自の展開・発展をして共存することになる。



## ■ 注 ■

- 1 鄭爾康《鄭振鐸》河北教育出版社、2001年 p24
- 2 豊華瞻・殷琦《豊子愷研究資料》寧夏人民出版社、1988年、p250
- 3 前掲ii、p253
- 4 蔣義海「毛沢東同志重視漫画芸術」《重慶日報》1983年12月25日 第2版
- 5 川瀬千春『戦争と年画』梓出版社、2000年、pp21-22
- 6 日本では諷刺漫画を主とする従来の漫画を「漫画」、コミックやストーリーマンガに属するものをカナで「マンガ」と表記することがある。この章で「マンガ」とした場合は「コミック。ストーリー系」漫画を指す事としたい。
- 7 傅春江「小議当前卡通、連環漫画狀況」《漫画信息》1998年第3期第3版。また、王呈「用漫画在産品與市場之間造一座『橋』」《諷刺與幽默》1999年第11期第7版ではマンガ利用の具体例としてコマーシャルのキャラクターが想定できると提案している。例) ヤマト運輸の黒猫マークなど。
- 8 楊樹山「当前我国漫画読者群定位初探」《漫画信息》2001年7月7日第6版：小中高大学生における最も好きな漫画の種類として諷刺漫画・児童漫画・科学技術漫画などのうち、連環漫画（ストーリー系）の割合が、小中高で89%、大学生で78%を占めた。この連環漫画というのは何かという問いに、ほぼ全員が“マンガ（カートン）”と回答している。

## ■ 参考文献 ■

- 畢克官・黃遠林《中国漫画史》文化芸術出版社 1986 年
- 西丁主編《美術辞林・漫画芸術卷》人民美術出版社、1998 年
- 楊曉文『豐子愷研究』東方書店、1998 年
- 森哲郎《中国抗日漫画史》山東画報出版社、1999 年
- 日下翠『漫画学のススメ』白帝社、2000 年
- 陳履生《新中国美術図史 1949 - 1966》中国青年出版社、2000 年
- 周軒・余訓培「中国内地現代漫画出版的困境」《出版广角》2002 年第 10 期  
pp61-63
- 日下みどり『漫画学入門』中国書店、2002 年
- 李叙・顧文瑾主編《新動漫 10 年經典》二十一世紀出版社、2003 年
- 劉一丁《中国新聞漫画》中国青年出版社、2004 年
- 日下みどり『中国漫画評論』（平成 13 年～平成 15 年科学研究費補助金萌芽  
的研究成果報告書：課題番号 13610690）、2004 年